

英国の歴史遺産—海岸リゾートの栈橋

PIERS研究会
(政策研究大学院大学客員教授)

井上 聡史



写真1 ブライトンのパレス栈橋

はじめに

日本と同じ島国である英国には、全国各地の海岸にリゾートが広がっている。しかし、その海岸リゾートに、沖に向かって長く伸びる栈橋が数多く建設されていることは、あまり知られていない。このユニークな栈橋を調べるため有志¹⁾が集まり、2013年6月末から7月初めにかけて現地を廻ってきた。滞在7日間で12本の栈橋を訪れると云う強行軍であったが、英国栈橋協会 (National Piers Society) の協力も得て予想以上の成果を上げることができた。

海岸リゾートの栈橋とは

まずは、この栈橋がどのようなものか、見て頂きたい。写真1は英国の南海岸にある有名なリゾート、ブライトンのパレス栈橋。ロンドンから特急電車で1

時間と近く、英国の海岸リゾートの歴史を引っ張ってきた拠点リゾートにある栈橋である。写真2はその少し東にあるイーストボーンの栈橋。建設当時のパビリオンや栈橋の雰囲気をよく残している。写真3は西海岸の貿易都市ブリストルに程近いクレブドン栈橋。スレンダーなアーチが貴婦人のように美しく、英国の第1級歴史遺産に指定されている。

実はこのような栈橋が全国の海岸に約100か所も建設された。それも産業革命が進展し、「世界の工場」として英国が繁栄を謳歌した1800年代のビクトリア朝時代のことである。日本にペリーの黒船が来たのが1853年、明治維新が1868年、ちょうどNHKの大河ドラマ「八重の桜」の時代である。その後これらの栈橋は波浪や高潮、船舶の衝突、火災などにより半数近くが既に消滅したが、英国栈橋協会によれば現在58本が



写真2 イーストボーン栈橋



写真3 クレブドン栈橋

残っている。また英国は日本に比べて潮位差が5mから14mと非常に大きく、さらに海岸リゾートは一般に遠浅であるため、干潮時にも船が着けるよう栈橋を延ばす必要があった。現在でも500mを越える栈橋が8本あり、テムズ川河口にあるサウスエンド栈橋は全長2,158mと世界一の長さを誇っている。

栈橋建設の幕開け

これら栈橋の発展段階を歴史的にみると、その萌芽期から地方展開期、第1次栈橋ブーム、第2次栈橋ブーム、そして世界大戦後から今日へと、大きく5つの時期に分けて考えることができる(図1)。

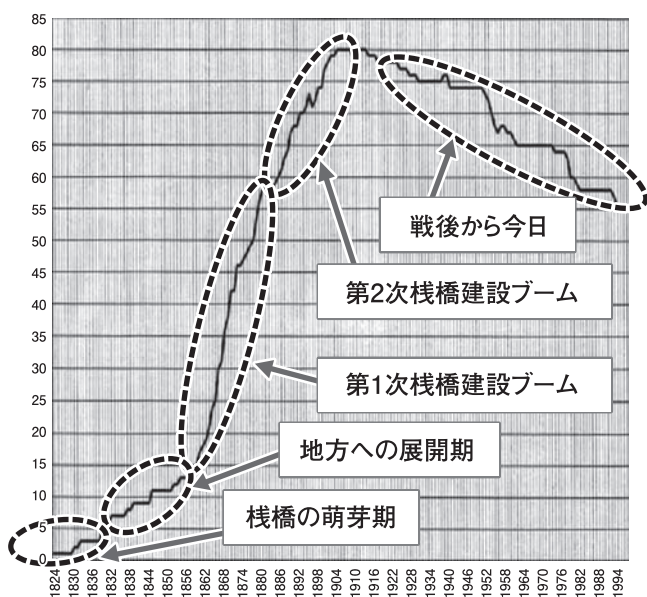


図1 英国の栈橋稼働数の推移
 出典：Guide to British Piers, 3rd ed. National Piers Society, 1998

英国では貴族など上流階級が保養と社交のため内陸の温泉リゾートを各地に開いた。さらに1700年代中期には海水が健康に良いと云われ、飲んだり海水に浸ったりするため、上流階級の間で海岸へ出かけることが流行り出す。やがて海辺を散策したり簡単な構造の栈橋の上を歩いたりすることが、時代の先端をいくファッションのようになっていく。と同時に、大勢のお供や荷物を運んで船で行く際にどうしても栈橋が必要だと建設し始めたのである。

こうした海岸リゾートはやがて大都市から地方の貴族たちにも普及していき、徐々に各地の海岸に栈橋が造られる。また上流階級だけでなく工場経営者や金融業者など産業革命のなかで成功した中流階級が誕生し、彼らも貴族たちの生活に憧れリゾートで滞在し始める。これが各地のリゾート開発に拍車を掛ける。と同時に帆船から蒸気船に切り替わるが、リゾートに船でやって来ると沖でまず手漕ぎのボ-

トに乗り移り、波打ち際に来ると今度は人夫の肩車や背中に負われて浜まで運んでもらい、そこから濡れた砂浜を苦勞して海岸のホテルまで歩かねばならない。海岸リゾートのこうした不便を解消するには栈橋の建設が不可欠となった。またその上を散策することが大きな魅力となったのである。

栈橋の建設ブーム

やがて1800年代の半ばに入り、栈橋が爆発的な勢いで建設され始める。かのマルクスも指摘したように、産業革命初期の工場労働者は休みもなく悲惨な居住環境の中で暮らしていた。しかし次第に労働時間を規制したり休日を設けたりして労働条件の改善が進むと、大量の労働者階級が一斉に海岸リゾートに殺到することになる。ちょうど蒸気鉄道が普及し始め、各地の工業都市とリゾートを結ぶようになったことも、このブームに拍車を掛けた。こうして一挙に海岸リゾートの大衆化が始まるのである。既存のリゾートは拡張され、新規のリゾートが各地に開発され、そのシンボルとして栈橋が競い合うように建設された。1つの海岸リゾートに2本目3本目の栈橋が建設されることも稀でなく、1860年から1880年の20年間で、なんと毎年2本以上の割合で栈橋が建設された。

こうした大衆化が進む中で、上流階級を主な利用者とした伝統を重んじる栈橋は、劇場やサロンなど各種のパビリオンを栈橋の上に整備して新たな社交の場を提供し始める。しかしその成功を見るや、大衆化した他の栈橋もこれに追随し、1880年から1900年頃にかけて第2次栈橋ブームが起きる。各地の栈橋は拡張され、収容人数1,000人、2,000人と云う大規模な劇場やサロンが栈橋の上に建造された。栈橋の大規模化、複合化の時代の到来であり、英国の栈橋がもっとも輝いた時代である。

今日の栈橋

1900年代初頭にも僅かに新しい栈橋が建設されるが、そうした栈橋建設も第1次世界大戦の開戦までにすべて終わりを告げる。第2次大戦後は、暫くの間、栈橋の利用者が一時的に戻りはしたが、嘗てのような熱狂的な状況には程遠かった。さらに1970年代になると飛行機による海外旅行が一般化し、安くて気候もよい南ヨーロッパの海岸リゾートへ多くの国民が出掛けるようになっていく。その一方で栈橋の老朽化が進み、利用者の減少は栈橋の維持を困難にし、すでに述べたように多くの栈橋が失われていった。

しかし、英国人にとって海は特別な存在のようである。夏だけでなく一年を通して安らぎと楽しみを与

えてくれる掛け替えのない大自然でもある。現在でも、国内の海岸リゾート栈橋は、気軽にリラックスする場として、また家族みんなで楽しめる場として、引き続き多くの国民に楽しまれている。まとまった休暇を大事にする英国人の生活様式もこれを支えていると云えよう。各地の栈橋を訪れるのは子供連れの家族から若者世代、老人夫婦まで実に幅広い年齢階層に渡っている。また社会の高齢化に伴い、老後の住まいを海辺のリゾート都市に求めることも少なくない。こうして栈橋は、海から離れた都市住民とならんで新旧の地元住民にとっても、生活の一部として身近な存在となっている。

多様な機能と魅力をもつ栈橋

さて栈橋の醍醐味であり一番の魅力は、なんと云っても「海の上を歩く」ことである。広い海原のもつ解放感を全身で感じ取るとともに、「船酔いをせず船に乗った感じを楽しめる」と云う表現もよく聞かれる。海が多少荒れても、濡れずに海の上を歩いて沖に出ることができるのは、やはり誰にとっても大きな喜びである。このプロムナード型の栈橋は、貴族たちが憧れた海の上の散策の場を今日も人々に提供し続けている。ゆったりとした沖に向かう視線軸を確保し、木製のプロムナードデッキが人にやさしい海上の散策空間を創り出している（写真4）。

また数は少なくなったが、当時のサロンや劇場が栈橋に残っている。今回訪れたブラックプールのノース栈橋には、1,500人収容の劇場や当時の意匠を残した野外型のサロンが先端部にある。海に沈む夕日を楽しみながら人々が集い寛いでいる。またクロマーの栈橋にある500人収容の劇場では、夏のシーズンに相応しいコミカルなショーが公演され年配のお客で満席であった。さらに今日的な需要に応じて会議や研修、ライブコンサート、結婚式など様々なイベントのための施設を完備したものも含め、ソサエティ・カルチャー型の栈橋がある。



写真4 ゆったりとした海上のプロムナード（クロマー栈橋）

一方、海に浮かぶ遊園地のようなアミューズメント型の栈橋もある。ブラックプールのサウス栈橋などは、開放的な海上に設置されたジェットコースターから観覧車や回転木馬などまで大規模なアミューズメント施設で多くの人達が歓声を上げている。またゲームセンターのようにパビリオン内にいろいろな遊戯装置を設置し、幅広い年齢の人達がゲームに興じている。機能的には栈橋の出発点と云うべき船舶の係留の場としての利用は、いまや活発ではない。定期船が頻繁に寄港する栈橋はほとんどないが、ワイト島など離島と本土を結ぶフェリーのターミナルを提供している栈橋はまだ各地にある。さらにリゾート客を乗せて付近を周遊する観光船の基地となっている栈橋も多数ある。

杭式構造がもつ魅力

ところで、これらの栈橋は、杭式の構造そのものが大きな魅力をつくり出していると云える。鑄鉄製の杭を砂地に打ち込んだ栈橋には、その構造のもつ独特の「軽やかさ」がある。石積みやコンクリートの構造物と違い、大規模でありながら人々に威圧感を与えない。これは海岸リゾートの中にあって、海の上を歩くと云うひとときわ非日常的な空間であるべき栈橋のイメージにピッタリである（写真5）。また林立する杭によって創り出される栈橋の構造が、沖に向かう「連続性」、「伸張性」を強く訴える。とくに栈橋の下に立つと、多数の杭組がつくり出す不思議な空間が、絶え間なく押し寄せる波に呼応して、栈橋が沖に呼びかけを繰り返しているように感じられる。

また杭式の栈橋がもつ空間的に「抜ける」感覚、「透明感」が、広大な海浜の連続性、一体性を壊すことなく、些かも違和感を覚えさせない。さらに面白いことに、栈橋の杭組越しに見える景観が新しい発見と魅力をもたらしている。多くの観光客が海辺に降り、栈橋の下から海や街をカメラに収めていた。



写真5 杭構造の軽やかさが印象に残る（ウェストン・スーパー・メアのグランド栈橋）



写真6 棧橋から街を振り返る(イーストボーン棧橋)



写真7 ブラックプールのセントラル棧橋からノース棧橋への海岸プロムナード

海岸リゾートと棧橋

もちろん棧橋は150年から200年もの歴史を持つ立派な歴史遺産である。当時は棧橋のデザインに、インドや中東のエキゾティックな雰囲気を醸し出し、非日常的な空間を作り出そうとした。棧橋に多く残る玉ねぎ型尖塔やドーム屋根をもつパビリオン、鋳鉄製の細かなレリーフを嵌め込んだ手摺りや柱など、棧橋を歩くだけでビクトリア朝時代の時間に浸ることができるのも大きな魅力である。棧橋に敷き詰められたウッドデッキの風化した様子が、歴史的な味わいを効果的に高めている。また棧橋の上からふと振り返ると、海岸リゾートの街並みが新鮮な別の顔を見せることも興味深い(写真6)。

さて棧橋は海岸にポツンと独立して建っている訳ではない。今回訪れた海岸リゾートでは、どこも海岸に沿って立派な遊歩道(エスプラナード)が整備されていた(写真7)。しかも海岸と市街地の間に段差がある所では、遊歩道の護岸の下部を店舗やギャラリー、トイレ、倉庫などいろいろな目的に使い、味気ない護岸が延々と続くのを上手に避けていた。遊歩道に沿って整備された防潮堤のゲートもスマートにデザインされている。また大規模なリゾートでは、マリナーやショッピングモールなども併せて開発されていた。

また英国では数十メートルの崖が海岸に迫っているリゾート都市も少なくない。ここでは切り立った断崖を逆に巧みに活かしてユニークな海岸リゾートをつくっている。崖の上の街からは海岸や棧橋を眺める格好の視点場を提供できる。また棧橋からは平坦な地形の海岸リゾートでは見ることのできない独特の立体的な景観を人々に提供できる。さらに、これだけの大きな段差を切り抜けるため、階段やつづら折りの坂道だけでなく、エレベーターやケーブルカーなどさまざまな工夫を凝らしリゾート客を楽しませている。

むすび

今回の調査を通して改めて思うことは、わが国の海岸リゾートがいかに貧弱であることか。日本の恵まれた資源であるはずの海辺が、人々の生活を豊かにする身近な存在になっているとはとても云い難い。さらに観光立国の戦略としても、内外の人々を惹きつける素晴らしい海岸リゾートを開発していくことが重要である。英国の事例はこれからの日本の海岸リゾートづくりを考えるうえで多くの示唆に富んでいる。

英国はじめ各国の棧橋(Piers)や海岸リゾートをさらに調べ学んでいくため、今回の有志が発起人となりPIERS研究会を立ち上げた。本調査の結果をとりまとめレポートを発行するとともに、その内容を幅広い分野の人々にわかりやすく伝えるセミナーなどを開催していく予定である。

最後に、今回の調査に協力頂いた英国棧橋協会、沿岸技術研究センター、みなと総合研究財団、港湾空港総合技術センターに心より御礼申し上げますとともに、調査に快く同行してくれたわが畏友ロンドン大学Richard Wiltshire教授に感謝したい。

注1) 古土井光昭、栢原英郎、井上聰史、加藤寛、黒田隆明、八尋明彦、大野正人

[参考文献]

- 川北稔編「イギリス史」山川出版社、2011年
- 小林章夫「地上楽園パース：リゾート都市の誕生」岩波書店、1989年
- 佐久間康夫、中野葉子、太田雅孝編著「概説イギリス文化史」ミネルヴァ書房、2002年
- フィリップ・S・バクウェル、ピーター・ライス、梶本元信訳「イギリスの交通」大学教育出版、2004年
- 村岡健次「ヴィクトリア時代の政治と社会」ミネルヴァ書房、1980年
- Cyril Bainbridge, "Pavilions on the Sea- a history of the seaside pleasure pier", Robert Hale Ltd., 1986
- Martin Easdown, "Piers of Sussex", The History Press, 2009
- Richard Fisher, John Walton, "British Piers", Thames and Hudson Ltd., 1987.
- Timothy Mickleburgh, "Guide to British Piers", Piers Information Bureau, 1998